

# 清少納言が日記的章段にかけた思い

——「雪のいと高う降りたるを」を中心に——

谷 崎 たまき 豊 福 めぐみ

## 一 はじめに

一年間の活動を通して、中古自主ゼミでは、松尾聰、永井和子編『新編日本文学全集』（以下『新全集』）をテキストとして『枕草子』の日記的章段を時系列の順に読んできた。それは活動報告でも述べた通りだが、もう少し詳しく紹介したい。また、これ以下の引用文及び章段数は『新全集』に拠るものとする。

『枕草子』は「山は」（二一段）、「すさまじきもの」（二二段）などといった類聚的な章段、「宮にはじめてまゐりたるころ」（二八二段）、「清涼殿の丑寅の隅の」（二〇段）など、日付が記されていないものの、ある時のある事柄について記録している日記的章段、「春はあけぼの」（一段）など、内容や形式が自由に書かれている随想的な章段の三つに分類することが出来る。この中の日記的章段のみを選び出し、時間が許す限り読み進めてきた。自主ゼミという限られた時間では、日記的章段を全て読むことはできなかったが、「枕草子年表」<sup>[1]</sup>と照らし合わせながら読み進めることで、我々なりのテーマを見つけることができた。

## 二 清少納言が残したかったもの

対象として扱った日記的章段の、「宮にはじめてまゐりたるころ」から

「上の御局の御簾の前にて」に描かれる場面は、中宮定子の父親である藤原道隆が中関白として隆盛を極めた頃の出来事である。帝が定子のもとを訪れている様子や、絵を鑑賞する場面などが描かれており、中関白家の栄華を物語っている。だが、「返る年の二月二十余日」以降に描かれている場面の歴史的背景としては、関白道隆が薨去し、中関白家は衰退の一途を辿っている。だが、『枕草子』の日記的章段は、定子サロンの華やかさや教養の高さなどに終始し、衰退の翳りはほとんど感じさせない。このことから、清少納言が『枕草子』を執筆することで、何かを後世に残そうとしたのではないかと考えた。道隆が薨去し、政権が嫡子の伊周ではなく道長に渡ると、定子は落飾を余儀なくされた。この現実に対して、なぜ清少納言は華やかな様子ばかりを書き残したのだろうか。

## 三 清少納言と中宮定子

『枕草子』の日記的章段には、清少納言と中宮定子の強い信頼関係や、教養レベルの非常に高いやりとりが描かれている。その中の一つとして、「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」（二八〇段）をとりあげたい。

この章段は日記的章段でありながらも、史実年時がいつであるのかが書かれていないため、いつの出来事かは確定できない。しかし、当段は、

萩谷朴編『新潮日本古典集成』（以下『集成』<sup>2</sup>）の注に、「『小右記』長徳元年正月二十八日条に「時々飛雪」と見える正暦五年晩冬から長徳元年早春の登花殿でのことか」と書かれていることから、この頃の出来事だろうということは推測できる。その場合、清少納言が定子のもとに初出仕したのが正暦四年の初春か初冬だとすると、その場面は清少納言が徐々に宮仕えに慣れ始めた頃の出来事であると考えられる<sup>3</sup>。

この章段は、言わずと知れた有名な箇所であるが、粗筋を説明しておきたい。

雪がたいそう高く降り積もった日に、御格子を下ろしたまま炭櫃に火をおこして、清少納言をはじめとする女房たちが雑談をしていると、定子は「清少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰った。すると、清少納言は御格子を上げさせて、御簾を高く巻き上げた。その行為に定子はお笑いになり、他の女房たちは「さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人にはさべきなめり」と言った、というものである。

清少納言は、定子の問いかけに対して『白氏文集』卷十六にある「香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁五首」の知識を活かし、御格子を上げさせて御簾を巻き上げるといふ行動をとった。この漢詩は、当時は比較的名なものであり、知っていること自体は常識の範囲内であった。だが、清少納言は定子の問いかけに対し、単純にその漢詩を詠んで答えたのではない。定子の問いかけから、定子が望んでいることが何なのかを即座に判断したのである。正に阿吽の呼吸である。しかも、定子は数いる女房の中から清少納言を指名している。それは、定子サロンに馴染んできた清少納言の実力を試すためか、あるいは、清少納言なら自分が彼女に何を望んでいるかわかるはずだ、という信頼関係によるものだろう。

か。

「さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人にはさべきなめり」という言葉には、論が幾つかあるものの、<sup>4</sup>の一連の様子を見た女房達は、清少納言を讃辞している。それ故、たとえ前者であったとしても、この時の清少納言の行為は他の女房たちには成せぬ業だった。そんな清少納言に、定子は信頼をおいたことだろう。

#### 四 清少納言の「われぼめ」

この章段は、清少納言の自讃談として知られている。見事に定子の期待に応え、周りの女房たちから賞賛されたことが清少納言の手によって書かれている。それは確かに清少納言の自讃談といえるだろう。『枕草子』には複数の章段にわたってこのような自讃談的な内容が伺える。

では、なぜ清少納言はこのようなことを書いたのだろうか。まず考えられるのは、単純に清少納言が自分の女房としての有能さや学識の高さを自慢したかったという可能性である。この場合、清少納言は自己愛や自己顕示欲の強い女性であるというイメージが確立する。

だがその反面、清少納言は「返る年の二月二十余日」では華やかで素晴らしい斉信の姿と対照的に、自分のことを、

いとさだ過ぎ、ふるぶるしき人の、髪などもわがにはあらねばにや、あるかなきかなる薄鈍、あはひも見えぬきは衣などばかりあまたあれど、つゆの映えも見えぬに、おはしまさねば、裳も着ず、袿姿にてあたるこそ、物ぞこなひにてくちをしけれ

と描写しており、ことごとく自分を卑下している。能力的なことと容姿は別物だと考えることもできるが、このような描写からは清少納言の強

い自己愛などは感じない。

以上のことから、清少納言の自己愛や自己顕示欲が強かったために自讃談を書いた訳ではないという可能性も考える必要がでてくる。そこで、清少納言が自讃談を書くことで得られる一つの効果として、自分が定子に信頼されている、または周りから賞賛される存在であることを描くことで、定子サロンのレベルの高さや、主従関係の中に強い信頼関係が築かれていたということを示そうとしたのではないかと考えた。

定子サロンのレベルの高さや信頼関係を描きたかったのならば、清少納言以外の女房を賞賛することも可能だという点で、前者の可能性は捨てきれない。だが、『枕草子』を一貫して定子が敬愛すべき最高の主であると描かれていることから、少なからず後者も目的の一つであったのではないだろうか。

## 五 まとめ

日記的章段のみを、史実と照らし合わせながら時系列に読んでいくと、『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』のような日記文学として『枕草子』を読むことができる。すると、先述したように『枕草子』は清少納言の周りで起きた出来事をその通りに記したのではなく、中関白家が衰退を迎えてもなお、中関白家の衰退の様子は描かれていないことがわかる。

日記的章段とは、つまり回想記であるが、なぜ清少納言は中関白家のありのままの姿を記さなかったのだろうか。『枕草子』には、清少納言と中宮定子の強い信頼関係や定子サロンの華やきが、時には自讃譚というかたちで描かれている。菊田茂男氏は、「枕草子の美意識（一）」で、『枕草子』における日記的章段が「中宮定子と中関白家に寄せる疑いなき賛嘆が主題となる」と指摘した上で、「自賛談と呼ばれている一連の叙述も、

実は、中宮の傑出した存在を引き立てるための方便にしかすぎない」と述べている。

道長が政権を掌握し、中関白家の栄華が過去のこととして人々から忘れられていく中で、清少納言は書くという手段で、後世の我々に至るまで中関白家の栄華を伝えたのである。つまり、清少納言は『枕草子』を書くことによって、素晴らしい中宮である定子と、彼女に仕える教養高い女房たちによる定子サロンが存在したことを後世に残そうとし、それに成功したのではないだろうか。

## 注

- (1) 松尾聰、永井和子編『新編日本古典文学全集（十八）枕草子』（小学館、一九九七年）付録より
- (2) 萩谷朴『新潮日本古典集成（第二二回）枕草子 下』（新潮社、一九七七年）
- (3) 注（一）と同じ
- (4) 岡田潔「枕草子鑑賞（第二六三段～第二八四段） 第二八二段「雪のいと高う降りたるを」」（有精堂編集部『枕草子講座2 枕草子とその鑑賞Ⅰ』、有精堂、一九七五年）や、久保木哲夫「枕草子における自讃談―その表現の方法と基板について―」（三田村雅子編『日本文学研究資料新集4 枕草子・表現と構造』、有精堂、一九九四年）にて、該当部分の説は三通りありと述べている。
- (5) 菊田茂男「枕草子の美意識（二）」（『清少納言とその文字』一九七五年一〇月）

## 参考文献

- ・萩谷朴『枕草子解環 五』（同朋舎出版、一九八三年）
- ・鄭順粉「第三章 枕草子の漢詩文の引用方法 第二節 「香炉峯の雪」の段の

- ・漢詩文の引用方法」(鄭順粉『枕草子 表現の方法』、勉誠社、二〇〇二年)
- ・李曉梅「第Ⅲ部 定子サロンと漢詩文 第一章 清少納言の「答」―「自讃談」にかかわる章段を中心に―」(李曉梅『枕草子と漢籍』、溪水社、二〇〇八年)
- ・小森潔「〈性差〉を超えて―清少納言と中宮定子―」(小森潔『枕草子 逸脱のまなざし』、笠間書院、一九九八年)
- ・坏美奈子「第二章 i 五月五日の定子後宮―まだ御子への予祝―」(坏美奈子『新典社研究叢書159 新しい枕草子論 主題・手法 そして本文』、新典社、二〇〇四年)